

近現代における地方小都市の盛り場の復原

— 水郷潮来の変遷を事例として —

前 島 裕 美

I. はじめに

- (1) 問題の所在
- (2) 対象地域の選定と研究方法

II. 明治以前の潮来・浜町

- (1) 浜町地区の概要
- (2) 江戸・明治期の浜町

III. 盛り場の復原

- (1) 大正時代
- (2) 昭和初期～昭和20年
- (3) 昭和20年～昭和30年代前半
- (4) 昭和30年代後半～昭和50年代前半
- (5) 昭和50年代後半～現在

IV. おわりに

I. はじめに

- (1) 問題の所在

戦後、人々の間で余暇活動に関する関心が高まってくるにつれて、この余暇活動の場を広く提供する盛り場にも徐々に関心が寄せられるようになってきた。これまでの地理学における盛り場研究には、大きく分けて二つの流れがある。まず一つは、服部銈二郎の研究¹⁾に代表される、盛り場を構成する施設や空間構成と都市機能とを絡めて考察する、都市地理学的な機能論である。そしてもう一つは、盛り場を構成する施設に重点を置くのではなく、その場所でのどのような出来事が起こったのかということに注目し、その出来事の描写に重点を置く研究である。

近年、地理学においては後者の研究が注目

されつつあり、文学作品を資料として京都市新京極の復原を試みた山近²⁾、また新聞記事を資料として鹿児島市天文館地区を復原した前屋敷³⁾の研究が代表として挙げられる。これらの研究で指摘されている従来の研究への批判は、『盛り場』とは恒常的に多数の匿名的な人びとが盛っていることであって、そうした『こと』を取り囲んでいる諸施設ではない⁴⁾と主張した社会学者吉見俊哉の考えに準じており、盛り場の特性を考えると、無視できない指摘ではある。

しかし、盛り場とは「場」という文字が表す通り、あくまでも「場所」であり、人々が盛るのも、賑わいが賑わいを呼ぶというだけではなく、何らかの集客装置、つまり人々にとって魅力的な施設があるからに他ならない。従来の研究のように、盛り場の構成のみに焦点を当てることは、盛り場研究として偏りがあると言わざるを得ないが、盛り場を構成する施設について触れずに、そこで起こった出来事のみを描写することもまたしかりである。

また、盛り場はあくまで都市を構成する一要素であるにもかかわらず、これまでの研究の中では、盛り場という場所が、あたかも孤立した空間であるかのように描かれており、盛り場と、その盛り場が属する周辺地域との相互関係が、軽視されてきたように思える⁵⁾。

そこで本研究では、盛り場を構成する施設及びその空間構成の変遷を捉えつつ、そこで起こった出来事の描写を行う。また、復原すると同時に、盛り場とその周辺地域との関連

性を考察していく。したがって、これら複数の視点により、盛り場のより全体的な姿が理解できると考えている。

(2) 対象地域の選定と研究方法

既存の盛り場研究においては、前屋敷(1997)が指摘しているように⁶⁾、おおむね大都市の盛り場が対象地域として選択されてきた。本稿では、これまであまり目を向けられることの無かった地方小都市の盛り場、しかも都市の規模の割には盛り場が大きかった場所を対象地域とする。その理由は、大都市の盛り場よりも、むしろ地方小都市の盛り場のほうが周辺地域の動向と密接に関わっていると考えられるためである。例えば高橋(1978)は“「地方」都市の盛り場の方が「周囲の人びとのものになりやすい」ために「地域社会への契機」をより多くはらんでいる⁷⁾と指摘している。

そこで、本稿では、茨城県行方郡旧潮来町(2001年4月、町村合併により潮来市となったが、以下「潮来町」と記す)浜一丁目(以下、通称に従い「浜町」と記す)地区を対象地域とした。潮来町は地方小都市というだけでなく、近世期以来の内陸水運の結節点であり、有名な観光地としての側面を持っている。また、隣接する鹿嶋市周辺では、高度経済成長期に大規模なコンビナートが建設され、潮来町も少なからず影響を受けた。

次に対象とする時期であるが、本稿では周辺地域と盛り場との関連を考察するために、潮来において大きな転機であったといえる、内陸水運の結節点という地位が揺らいだ大正時代から、鹿島臨海工業地域の発展を受けて、周辺地域における町の位置づけが変化した現在までの変遷を复原した。なお、本章第一節で述べたように、盛り場内の施設の変遷を捉えるため、Ⅱ章以降において浜町の空間構成を复原した地図を作成し、それと同時に時期ごとの盛り場の様子を伝える資料とし

て、文献や当時の新聞記事の検討、及びその地域に暮らした人々から聞き取り調査を行った。

Ⅱ. 明治以前の潮来・浜町

(1) 浜町地区の概要

本稿で対象地域とした潮来町は茨城県南東部にあり(図1)、北浦と常陸利根川(利根川の支流)の合流地点に位置する人口約2万6千人(1995年現在)の町である。従来から「水郷」の呼び名で観光客には知られていたが、JR鹿島線が昭和45(1970)年に開通するまで、周辺一帯は「陸の孤島」と揶揄されるほど不便な地域であった。

しかし、利根川水運が唯一の交通手段であった中世～近世にかけて、潮来は水上交通の要所として栄え、とりわけ近世前期は潮来の河岸の最盛期であった。潮来は「東廻り航路」の要所となり、東北地方から江戸へ米、木材、海産物などの物資を中継する役割を果たすと共に、東北諸藩の物資調達とも結びつく点で重要な役割を担っていた。そして慶安2(1649)年に仙台藩の蔵屋敷が建設されたのを始めとして、津軽藩、南部藩の蔵屋敷も置かれた⁸⁾。

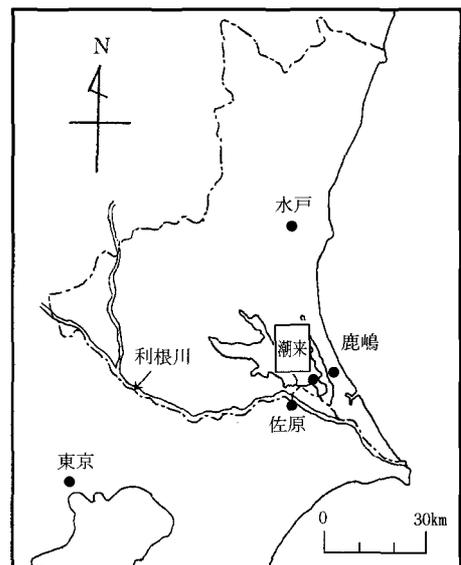


図1 潮来町の位置

このように河岸が繁栄してくると、潮来の河岸に限らず、「船女房」と呼ばれる職業が生まれた。「船女房」とは、船の中で男性の身の回りの世話をすると同時に売春業を営む女性のことである。河岸では、労働者である男性の人口が女性に比べて圧倒的に多くなるため、このような職業が生まれた⁹⁾。

やがて潮来の河岸に更に活気が生じるにしたがって、「船女房」も元来の性格を変え、陸に上がって遊びの要素が強くなっていった。そうなる治安や風紀上の問題も多くなり、河岸の繁栄の傍らで毎夜毎夜繰り広げられる騒ぎに、一般の人々は辟易していたという。その解決策として、天和元（1681）年に水戸藩は条件付きで¹⁰⁾ 潮来に遊廓を設置することを許可し、貞享元（1684）年に遊廓の一部が開業した¹¹⁾。遊廓設置の場所は新町、後に浜町と呼ばれる地区であり、この浜町地区の花街が、本稿の対象地域となる盛り場である。

前述の通り、本稿で対象地域とする浜町地区は、遊廓が起源となって発生した盛り場である。もちろん盛り場には遊廓が起源となっているものだけではなく、様々な起源と性格を持つ盛り場が存在するが、特に本稿において盛り場という場合、妓楼・芸者屋・料理屋など花柳界である地区を含む花街、及び飲み屋などが集まり、一般に歓楽街といわれる街区を指すこととする。

(2) 江戸・明治期の浜町

江戸・明治期における浜町の遊女屋数（後の貸座敷）及び遊女数は表1に示した通りである。得られた時代のデータに偏りがあり、数値が欠損しているものもあるが、天保期がピークであったと考えられる。

潮来の河岸は様々な要因¹²⁾が重なって、18世紀初頭ごろから河岸としての役目を果たさなくなり、それと同時に潮来の賑わいにも陰りが見えてきた。しかし、近世中期に江戸の文人や関東各地の庶民の間で水郷一帯を遊

表1 江戸・明治期における浜町の遊女屋数及び遊女数

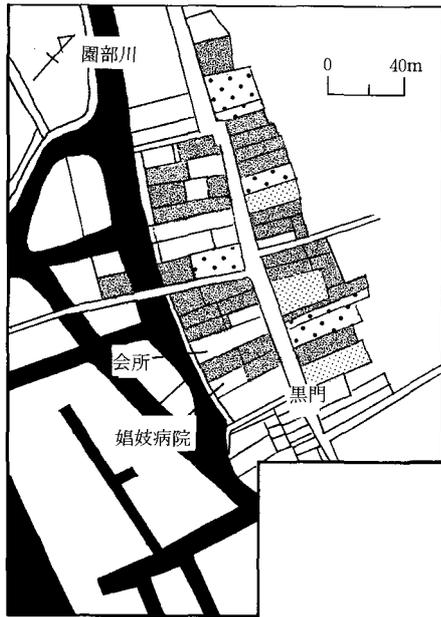
年 代	遊女屋数 (軒)	遊女数 (人)
元禄4年(1691)	8	—
正徳5年(1715)	9	85
享和元年(1801)	7	66
文化3年(1806)	6	—
文政8年(1825)	6	—
天保10年(1839)	6	169
天保11年(1840)	6	140
天保12年(1841)	6	169
明治元年(1868)	9	100余
明治5年(1872)	6	—
明治26年(1893)	5	68

(潮来遊里史・潮来図誌・潮来絶句・潮来節より作成)

覧することが流行した¹³⁾ため、潮来の衰退に歯止めがかかった。浜町の花街の客層も、遊廓開設当時は河岸関係者が大多数であったとみられるが、その後時代と共に客層も変化し、文人墨

客と呼ばれる人々や一般の旅人へと変わっていった。その頃の浜町の賑わいは、井口二峰の『潮来図誌』¹⁴⁾や渡辺華山の『四州真景』に確認できる。

一方、明治期の浜町については、江戸時代に比べ残存資料が少ないために、状況を判断することが困難であるが、小川泰堂『観海漫録』には、明治初頭の浜町について「歓楽この里にきはまるぞと思はる」状態であったと述べられている¹⁵⁾。また、明治中期には波末巴屋主人『潮来繁昌誌』¹⁶⁾が出版され、浜町の三業組合から『新版 潮来浜町芸娼妓出世双六』¹⁷⁾なども発行されている。これらの史料により、明治中期においても、浜町が依然として繁栄を続けていたことが予測できる。残念ながら明治中～後期にかけては、当時の様子を詳しく知ることはできない。しかし、明治初～中期については、新庄桜涯『潮来華街史』に、かつての施設の位置を確認できる情報が記されており¹⁸⁾、その記述をもとに昭和初期の地籍図を利用し、復原地図を作成した(図2)。



[凡例]



図2 明治初～中期の浜町

(『潮来花街史』および聞き取り調査による)

図2～6は日本地図調査協会(1930)『潮来町地番及別地目入図』を一部改変して作成。なお、図5・6では園部川は埋め立てられて道路となったため、「旧園部川」と表記した。また、園部川周辺は戦後区画整理され、地籍が大きく変化したため、図5・6では旧遊廓部分のみ表示した。

Ⅲ. 盛り場の復原

具体的な復原に入る前に、対象期間について整理しておきたい。以下の復原作業を行なうにあたって、対象期間を便宜的に次に示した5つに区分した。本章では、この時期区分を基に論を展開する。

- ①大正時代
- ②昭和初期～昭和20年(戦前・戦中)
- ③昭和20年～昭和30年代前半(戦後)
- ④昭和30年代後半～昭和50年代前半(高度

経済成長期)

⑤昭和50年代後半～現在

なお、聞き取り調査は、一人あたり数回の面接形式で合計6人に行なった(話者の属性は注を参照)¹⁹⁾。また、情報の信憑性を高めるために、同じ時代について複数の人に証言を依頼し、内容の確認をした。

本稿ではこれら聞き取りの内容をもとに、各時期の盛り場の復原地図を作成した。上記①及び②に対応する地図については、昭和5年発行の地籍図を利用し、④、⑤の地図については、各時期ごとの住宅地図を参考に、前述の地籍図をベースマップとした。なお、③の時期の復原地図を作成し得なかった理由については後述する。また、以下の記述において、文献資料による場合は注釈で示すが、それ以外は聞き取りの内容に拠った。

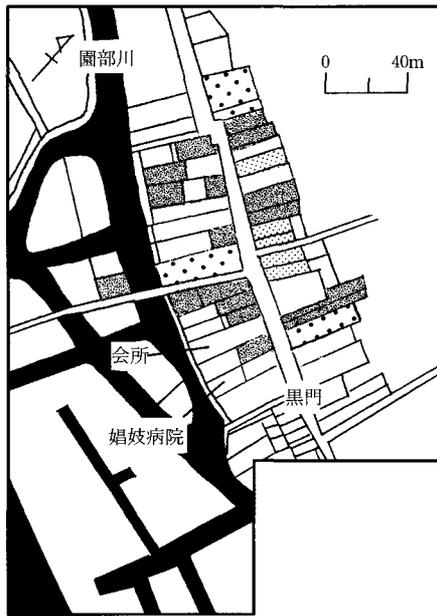
(1) 大正時代

明治初～中期の浜町を復原した図2と、大正時代の前期について復原した図3を比較すると、明治から大正にかけて浜町では、花街全体において店舗数が減少しており、さらに業種別に見ると、とりわけ引手茶屋数の減少が顕著であったことが解かる。当時、浜町の引手茶屋が廃業に追い込まれる過程が、大正2年の『いはらき』新聞に掲載されているので、以下にその記事を抜粋する²⁰⁾。

資料1

【潮来妓樓の革命 直接の客を受ける】
(原文・ただし妓樓の実名は略した)

「行方郡潮来町に於ける妓樓は舊來A樓(娼妓十六人)、B樓(娼妓十一人)の二軒にして之れに對する引手茶屋は十八軒あり登樓客は舊慣上孰れも此の引手茶屋の手を経るを常とし斷じて直接の登樓を許さず若し妓樓にして直接に遊客の登樓を許したることと發覺せば罰金を科す



[凡例]



図3 大正前期の浜町

(『潮来と鹿嶋香取』及び聞き取り調査を基に作成)

る等の制裁ありし為め引手茶屋は自然横暴に流れ年々二萬餘の嫖客ありしもの去年の如きは一月より十二月末日までの調査に於いて一萬八千九百十三人此消費金額一萬二千八百廿二圓十八錢に減少したる位なれば妓樓は之れを引手茶屋の弊としA樓は昨年八月中直接登樓を受くるに至れり然るに引手茶屋側は之に對し示威運動を開始しA樓には一切遊客を送らざることを決議したのみならず翌九月廿四日十八軒の引手茶屋公同にてC樓と稱する貸座敷を開業し九名の娼妓を雇い入れてA樓に對抗したるが遊客は直接の方便なりとて之れを歓迎し引手茶屋は殆んど立ち行かざる迄の不景氣風を食らひ居たる矢先B樓も亦引手茶屋がC樓にのみ

客を送りて自家に冷淡なるを憤慨し本月四日より直接登樓の客を呼ぶこととしたるを以て今は十八軒の引手茶屋殆ど施すに術なき有様なりと」

引手茶屋の減少については、浜町の花街に限ったことではなく、当時日本全国の花街に共通してみられる傾向であった。引手茶屋を介さずに、直接貸座敷に登樓する制度がこの後主流になっていったのは、大正時代から昭和初期にかけて起こるモダニズムの影響が色濃く表れている。古いしきたりを捨て、合理的に物事を考えるようになったのは、花街へ通う男性だけではなく、当時の日本全体の流れであった²¹⁾。

さて、次に浜町の花街全体における盛衰について考察するが、前述の通り、図2と図3とを比較すると、明らかに大正時代においては店舗数が減少しており、大正時代に入ると浜町の花街は衰退したと判断することができる。また、それを裏づける資料として、例えば、大正7年刊の高塚菰村『潮来と鹿嶋香取』に以下のような記述がある²²⁾。

資料2 (括弧内筆者、一部省略)

「明治維新の前後までは…(中略)…等(九軒)の妓樓ありて、引手茶屋も四十餘戸あり。遊女も百餘人を數へたりしが常磐鐵道の開通してより、水路の交通陸道の便におされ、衰運また振はざるの勢あり。妓樓の如きも今は半ばを減じたり。現時の状況は左の如し。

貸座敷 (三軒)

引手茶屋 (十七軒) 」

また、大正14年刊の本宮三香『水郷巡り』に収められている、浜町をうたった竹枝(ちくし：男女の情事や土地の風習などを歌った詩)には、「竹枝誰唱旧繁華(口語訳：いま竹枝を声高に歌って、昔の榮華をなつかしむの

は、いったい誰だろうか)』²³⁾という一節が含まれている。これらの記述からも、大正時代の浜町の花街は、明治時代に比べ衰退の傾向にあったと判断しても良いであろう。

花街の衰退の原因としては、前出の『潮来と鹿嶋香取』でも触れられているように、この時期の陸路の発達と、水運によって支えられていた潮来との関係が大きな原因であると考えられる。『潮来と鹿嶋香取』に書かれている常磐鉄道(現JR常磐線)は、明治28(1895)年に土浦-友部間開通、翌年には土浦-田端間が開通するのであるが、潮来に直接の影響を与えたのは常磐鉄道よりも、むしろその後少し遅れて開通する成田鉄道(現JR成田線)、総武鉄道(現JR総武線)であると思われる²⁴⁾。

成田鉄道の佐原駅が開業すると、対岸の佐原が利根川水運と成田鉄道の接続の役割を持つようになり、下利根川、霞ヶ浦、北浦方面から成田・東京方面へと乗り継ぐ旅客や貨物の積み替えは全て佐原駅で行なわれるようになった。成田鉄道は利根川舟運業者と連帯運輸の契約を結び、佐原駅が霞ヶ浦・北浦の水運と東京とを結ぶ重要な積み替え地となったのである²⁵⁾。佐原駅が開業し、この地方のターミナル的役割を強めるにしたがって、かつて河岸が繁栄していた時代ほどではないにしろ、水運に頼る周辺地域の中心的役割を果たしていた潮来が、その重要性を失っていったのである。そして、この時期、前述の通り、浜町の花街も同様に活気を失っていった。ちなみに全国的には花街内の引手茶屋の数は減少していたものの、その後、異業種に転業するなどして、花街の規模自体は必ずしも縮小していたわけではなかった。

(2) 昭和初期～昭和20年(戦前・戦中)

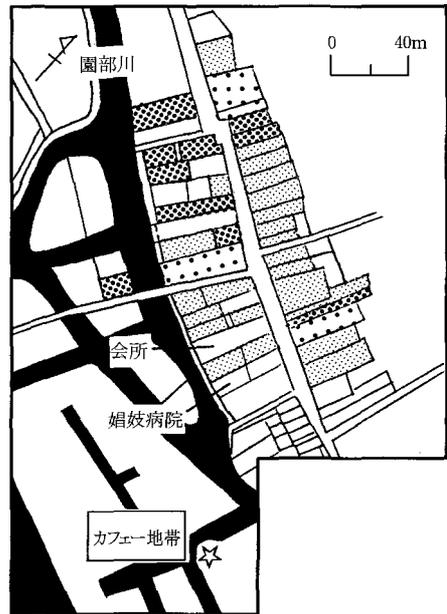
図4は、昭和初期(昭和5年前後)の浜町の花街の復原図である。図3と図4とを比較すると、昭和初期には大正時代と比べて、花街全体の店舗数が再び増加していることがわ

かる。業種別に見ると、芸者置屋及び料理屋の増加が著しく、図3で示した引手茶屋17軒中、7軒が芸者置屋に、9軒が料理屋に転業していることが確認できる(図4)。

このうち芸者置屋について着目してみると、大正時代には全く見られなかった芸者置屋が、昭和初期になって出現している。このことについて昭和4年刊の松川二郎『全国花街めぐり』の潮来の記事には次のような記述がある²⁶⁾。

資料3

「名物『あやめ踊り』を踊るものは娼妓であって、その関係から各樓とも十二、三名宛の娼妓が居ったのであるが、近年芸妓の増加するとともに、娼妓の数は漸次減退しつつある。」



[凡例]

-  貸座敷
-  芸者置屋
-  料理屋
-  一般商家・民家
-  水面

図4 昭和初期の浜町

(『全国花街めぐり』及び聞き取り調査を基に作成)

以上の記述から、浜町の花街の主役がこの時期に、かつての娼妓から芸者に移行し始めていたことがわかる。この変化も前節で述べた引手茶屋のケースと同じく、浜町の花街に限ったことではなく、明治後期から昭和初期にかけて見られた全国的な現象であった。日本全体において、明治25年に比べて大正14年には芸妓屋の数は約3倍、芸妓数に至っては約5倍も増加しているのである²⁷⁾。実際浜町の花街においても、昭和7年前後に貸座敷はみな廃業して、廃屋はすぐに子供の格好の遊び場へと変身し、娼妓は一人も居なくなってしまうという。では、浜町から貸座敷が消滅したことによって、売春行為が行なわれなくなったのかというと、実はそうではない。浜町では貸座敷が廃業する時期と前後して、無許可の売春婦がいる「だるまや」²⁸⁾と呼ばれる飲み屋が出現し始めた。もちろんあくまで無許可営業なので、その正確な実態や数は不明である。

また、図4の下方(東)に注目してみると、当時カフェーが軒を連ねていた「カフェー地帯」が出現していることがわかる。ただし、この「カフェー地帯」は、行政区分上浜町からは少しはずれている。潮来のカフェーでも、同時期に都会で流行したカフェーと同様、女給は白粉を厚く塗りたくり、白いひらひらのエプロンを身にまとい、蓄音器から流れる音楽に合わせてダンスを踊ったりしていたという。そして店の外では、女性たちがこぞって客引きをしている姿が見られた。浜町の花街近辺に突如として出現した「カフェー地帯」は、独特の淫靡な雰囲気醸し出し、昭和初期にはそれなりの人気を集めていた。学校でも「カフェーがあるようなところに行くような奴は減点だ」などという冗談も出るほどであったという証言もある。

以上のことをまとめると、昭和の初期に浜町界限は、旧来の芸者置屋や料理屋だけではなく、「だるまや」と呼ばれる私娼のいる飲み

屋、それにカフェーなどが混在する花街へと変貌していった。この花街の変化は、前節で述べた、大正時代からの変化の流れを継続している。

海野(1991)は盛り場とモダニズムの関連において、大正末期～昭和初期という時期を、現代都市のライフ・スタイルが成立した時期として、従来のような元号で区切るのではなく、「1920年代」という視点を導入することを提唱している²⁹⁾。本稿での大正～昭和初期にかけての浜町の施設の変遷を見る限り、この指摘と符号する部分が多い。しかしながら、図3、図4で示したように、衰退期とみられる大正期と再び賑わいを取り戻した昭和初期と、二時点には大きな差異がみられる。そこで本稿では、大正時代と昭和初期とを分けて考えることとした。

昭和初期の花街の中は活気に満ち、毎日が祭りさながらの状態で、花街の中を流れる園部川は、遊客や芸者を乗せた舟でいつもいっぱいだったという。また、前出の『全国花街巡り』にも「…(前略)…更に、明治になってからは常磐線の開通に由り交通線外に除去せられた結果、稍や衰頹の兆があったが、十餘年來遊覧地として復活するに至った」と書かれている³⁰⁾。

しかし、本節で取り扱っている昭和初期とは、昭和4年のニューヨーク株式暴落から始まる世界恐慌が起こった時期であり、その煽りを受けて、昭和5年には日本でも昭和恐慌が本格化した。特に農業を中心に不況が深刻になり、農林省「農業経済調査」によると、大正14年には農家所得の年平均が約1,800円であったのに対し、最も所得が落ち込んだ昭和6年には、3分の1の600円程度まで落ち込んでいる³¹⁾。

本稿の対象地域である潮来町一帯は当時典型的な農村であり、しかもこの時期の花街の客層とは、潮来町近辺の住民であった。その証拠に、当時花街の近くには、現金を持って

いない農民のために、米を現金に換金する両替所があり、舟に米俵を積んで浜町にやってくる遊客は、その両替所に必ず寄っていったという。なぜ浜町はこのような時代に再び賑わいを取り戻すことができたのであろうか。そこで、当時の潮来近辺の実情を『潮来町史』によって検証してみた。

大正末～昭和前期の茨城県の農業は、明治期の米麦雑穀生産中心の農業から変化して商品作物生産の比重を高めていた。とりわけ、養蚕業の割合が高く、農業生産価格の二割近くを占めていた。そしてこの養蚕業を恐慌が直撃したのである。アメリカの不景気で生糸の価格が下がったことを反映して、日本の繭の値段も下がり、国内と海外の双方の不況が農家をおそって、大変な不景気が起こった³²⁾。しかし、この時期の潮来町域は圧倒的な水田地帯であり、しかも畑面積中の桑畑面積が茨城県全体に比較してきわめて低位であった³³⁾。そのため恐慌による大きな被害は免れることができたのである。その上当時この近辺では、農家の副業として米作の副産物である藁を利用した箆吹（むしろかます）製造が盛んに行なわれていたが、その製品が注目を浴び、全国的な不況の中でも「近年にない活況」、「不景気知らず」と新聞でも報じられた³⁴⁾。

このように箆吹製造は、不況下の潮来周辺の農家に現金収入をもたらし、農産物価格の大幅下落による農家経営への打撃を軽減した。そしてこのことが潮来の繁栄を維持した要因のひとつであった。前述の通り花街の遊客のほとんどが潮来近辺の人間であったということを考えると、花街の繁栄がそのまま町としての繁栄も表わしていたといっても過言ではないのである。

その後浜町に変化が起き始めたのは、昭和13～14年頃で、それまで毎夜毎夜聞こえていたお囃子の音が、ぷつぷつと消えたのだという。そのことは『いはらき』新聞の浜町を扱っ

た記事内容の変化からもうかがえる。例えば昭和12年2月26日付の『いはらき』新聞には、待望の旅行シーズンをひかえて、潮来町の旅館・芸妓・料理カフェー組合が接客講習を行なうといった趣旨の記事が掲載されている。しかし、その約1年後の昭和13年6月12日付の同新聞には、潮来町の芸妓置屋組合が陸軍病院を慰問したという、いかにも戦時中であることを意識させる内容の記事が掲載されており、以後浜町関係についてはこの記事を境に慰問の記事のみが頻繁に出現することになる。全国の花街に対して、昭和16年に国から正式に「歌舞音局停止」の命令が出されるが、浜町はその2、3年前から自主的に営業を自粛していたようである。

このように戦時中は花街らしさを失っていた浜町であるが、昭和初期から続く「だるまや」だけは健在であったようで、現潮来町の大原村大生及び釜谷地区にあった北浦海軍航空隊に所属する海軍兵が、浜町を時折訪れては「だるまや」を冷やかしていったという。しかし「だるまや」の私娼たちも、昭和初期の頃のようにおおっぴらに営業できたわけではなかった。とにかく戦時中の浜町は、昭和初期の賑わいを知るものにとっては、想像をはるかに超えた寂れぶりであったということである。

(3) 昭和20年～昭和30年代前半（戦後）

先に述べたように、この時期の浜町の復原図は作成することができなかった。その理由は、終戦後の浜町は戦時中の営業自粛は解けたものの、聞き取りや資料によって、花街の具体像を明らかにすることが困難であったため、地図上での復原は不可能であった。

具体的に終戦後の浜町はどのような様子であったのかというと、前節の戦時中の様子とほぼ変わらない状態であり、当時の浜町については「うつろな目をした女性が、芸者屋の塀の穴からぼんやりと宙を眺めていたりし

て、恐くて仕方がなかった」という証言もあるくらいである。

潮来は戦前から観光地として名を知られていたが、戦時中は食料増産のために、観光名所のアヤメ園を、畑に変えざるを得なかった。しかし、昭和25年頃からアヤメ園の復興を皮切りに観光施設の充実に力を入れ、その甲斐あって年々潮来を訪れる観光客は増加していった³⁵⁾。昭和初期の恐慌時に潮来を救った農家の副業である筵吹製造は、もはや振るわなくなっており、潮来町は観光産業によって復興を成し遂げようとした。このように潮来町民は、農村ゆえに食料増産に励む一方、町をあげての観光地としての復活に手一杯で、花街に通っている余裕はなかった。

なお、終戦から約10年後の昭和32年10月8日付の『いはらき新聞』に、「悪臭放つ園部川 観光客の不評かう」という表題の記事が掲載されている。かつて浜町のシンボリック存在であった園部川が、潮来町のごみ捨て場と化し、糞尿を撒いていく人までいる始末で、観光客からも不評をかっていているという内容の記事である。かつては浜町といったら園部川というくらいで、夜になると川面に何艘もの船が浮かび、ゴミを放置することなど考えもつかないことであった。それに対して、もはやこの昭和32年掲載の新聞記事からは、浜町に対する人々の愛着が全く感じられず、意識の変化を痛感させられるのである。

この記事が掲載された約半年後に売春防止法が施行されるのであるが、この当時の潮来の様子を、飯島（1958）は『利根川』の中で、「全く俗化して東京の赤線区域とちっとも違わなかった」³⁶⁾と書いている。ところが、潮来在住の大久保（1993）は『潮来遊里史』の中で、この当時「潮来の路上に夜の女や街娼の姿はなかったはずで、わたしには、この点フィクションとしか思えない」³⁷⁾と批判しており興味深い。『潮来遊里史』によると、昭和26年頃までは私娼の姿が浜町にも見られたと

のことであるが、聞き取り調査によれば、私娼がいたにはいたものの、東京の赤線区域とは大分様子が異なっていたようである。

(4) 昭和30年代後半～昭和50年代前半 (高度経済成長期)

図5は、昭和40年代後半の浜町の復原図である。昭和40年代後半というと、ちょうど日本の高度経済成長が終焉を迎える時期にあたる。この時期の浜町には図5の通り、芸者置屋、料亭・割烹、ホテル・旅館、バー・スナックなどが混在していた。当時の浜町の盛況は、聞き取り調査によると、昭和初期の賑わいに匹敵するかそれ以上であったという。図4と図5とを比較すると、昭和初期のほうが芸者置屋の店舗数は多いが、高度経済成長期には一軒の置屋が抱える芸者数が昭和初期に比べ圧倒的に多く、在籍する芸者が花街全体で百人を超えていた時期もあった。

ところで前節では、終戦後も戦時中と変わらず、浜町の花街の人気は停滞していたと述べた。では、なぜその後十数年の時を経て、浜町は再び賑わいを取り戻したのであろうか。その理由は日本の高度経済成長に伴う「開発」と関係する。

昭和30年代後半から昭和40年代後半にわたって、「全国総合開発計画」に基づき、潮来町に隣接する現在の鹿嶋市（当時鹿島郡鹿島町）・鹿島郡波崎町・同郡神栖町を中心に、鹿島臨海工業地帯の開発が行なわれた。当時開発予定地であった一帯は、静かな半農半漁の集落であり、鹿島町には旅館が一軒、神栖町には旅館と食堂が一軒ずつのみといった状態で、娯楽施設というものは無きに等しかった。

このように当時鹿島近辺では、潮来の浜町以外に娯楽施設が無かったために、開発がらみの接待はほとんど浜町で行なわれた。東京から土地のブローカーが押し寄せ、鹿島に進出する企業は、浜町の料亭と専属契約を結ん

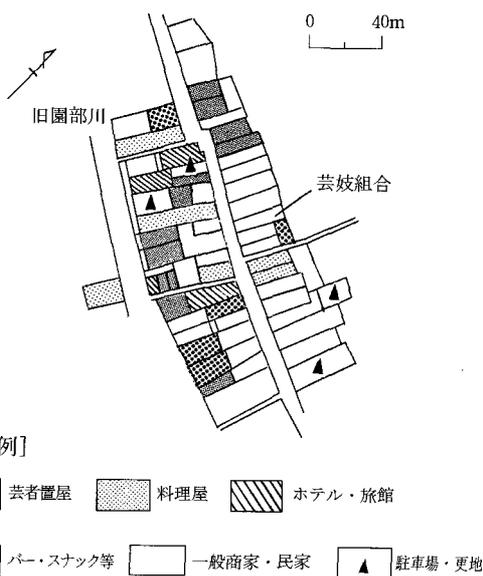


図5 鹿島開発期の浜町

(ゼンリン『潮来町 住宅地図1974年』及び聞き取り調査を基に作成)

でいた。そうでもしないと店に入ることではできず、芸者に関しても一カ月前に御座敷の予約がいっぱいになってしまうほどの盛況ぶりであった。

浜町の料亭や芸者置屋がそうした外部の人間の接待に利用される一方、地元の人々は浜町内のバーやスナックを好んで利用していた。しかるべくしきたりを持った花街は、接待には都合の良いものであったが、すでに若者を引きつけるものではなかった。日本のほとんどの花街は、昭和30年代から40年代にかけて衰退し、夜の盛り場には、バー・キャバレー・クラブ、それに小料理屋などが軒を連ねるようになった³⁸⁾。しかし、浜町の花街ではそのような時期においても図5の通り、伝統的な花街とバーやスナックのような簡便な飲食施設が共存していたのである。

この、あまり他に類を見ない共存を可能にしたのは、前出の鹿島臨海工業地帯の開発である。前述の通り、この開発は浜町の花街に接待の需要をもたらし、浜町の伝統的な花街

を存続させた。そして、更に地元の人間にも、バーやスナックに繰り出す余裕を与えた。鹿島臨海工業地帯の開発に伴い、長い間「陸の孤島」と呼ばれてきた潮来に鉄道が開通し(昭和45年)、工業地帯のための住宅団地やニュータウンも潮来町に建設された(昭和52年)。また、工業地帯が形成されたために、潮来町における雇用の機会も著しく増加し、町は徐々に発展していった³⁹⁾。そして、町の発展に伴い浜町も、伝統的な芸者置屋や料亭と、簡便な飲食施設が共存する花街として繁栄したのである。

(5) 昭和50年代後半～現在の浜町

図6は、平成11年現在の浜町である。図5と比較すると、浜町全体の店舗数が激減していることが分かる。芸者置屋は既に無くなり、飲み屋の類も現在はほとんど見られない。わずかに残る料亭や割烹のみが、かつてこの場所が花街であったことを示しているに過ぎない。現在浜町において最も目に付くものは、家屋が取り壊された後に残る更地や駐車場であり、昼夜を問わず人通りはほとんどない。鹿島開発が終了した後、なぜこのように浜町は変貌を遂げてしまったのであろうか。

昭和50年頃には鹿島開発もほぼ終了段階にあったが、工業地帯は完成したものの、その他の地域は依然未開発のままであったため、浜町の花街は相変わらず接待の利用客などで賑わっていた。しかし、昭和50年代後半になると、鹿島近辺の地域開発が進行し、浜町に足を運ぶ客は少なくなっていった。それを反映して、昭和50年代前半には70名ほど在籍していた芸者が、昭和50年代後半には数名に減ってしまった。開発が終わり、接待の需要が途切れたことに加えて、伝統的な花街を敬遠する人も増え、さらに訓練が厳しい芸者を志す人もいなくなり、浜町の芸者置屋は次々と廃業していった。

前節でも触れた通り、高度経済成長期以

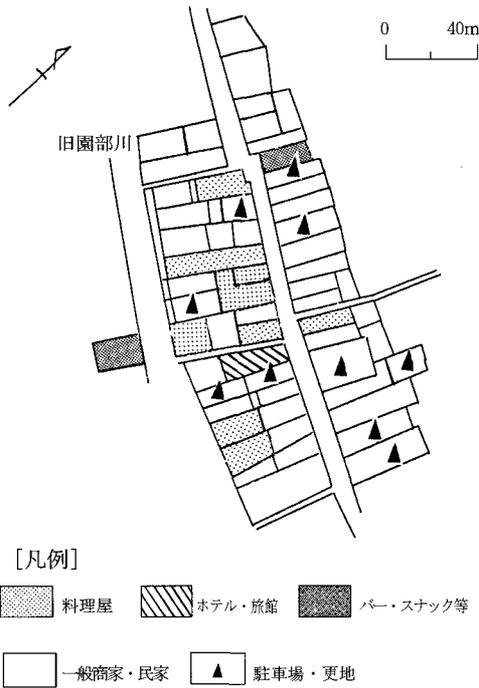


図6 現在の浜町
(現地調査を基に作成)

降、伝統的な花街が寂れていくのに相反して、格式張らないホステスやコンパニオンを置く飲食店は著しく増加し、昭和52年に起こったカラオケブームはその現象に更に拍車をかけた⁴⁰⁾。浜町の場合も、開発の接待客はいわば「特需」であったわけで、人々の花街離れは既に開発当時から進行していたのである。さらに、現在の浜町は芸者置屋どころかバーやスナックなどの簡便な飲食施設までも皆無に等しい状態になっており、盛り場という雰囲気はもはや全く感じられない。なぜ浜町では、伝統的な芸者置屋や料亭だけではなく、その他の店まで同時に減少してしまったのであろうか。

鹿島に開発の手が入るまで、「陸の孤島」と形容されてきたこの地域において、潮来町は唯一早くから開けていた中心的存在であった。そのため多少の盛衰は繰り返してきたものの、浜町の盛り場は絶えることなく存続し

てきたのである。しかし、鹿島開発が終了した後、その形成は変わってくる。鹿島周辺の地域が大きく変貌し、潮来よりも発展してしまったのである。鹿島町(当時)と潮来町の規模が鹿島開発によって逆転したことは、人口の変化から見ても明らかである(図7)。

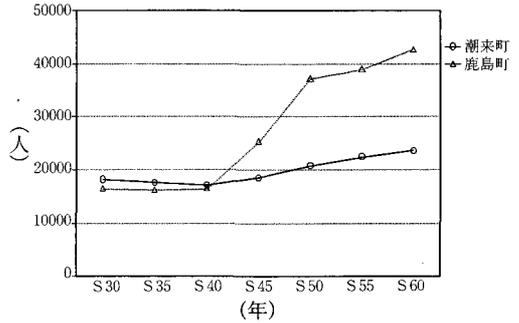


図7 鹿島開発前後の人口変化
(国勢調査を基に作成)

また、当時の発展ぶりを示す一例として、高校地理教育談話会『開発と地域の変貌 鹿島臨海工業地帯』には、鹿島について次のような記述がある⁴¹⁾。

資料4

「…(前略)…食堂、食料店、化粧品、電気器具、オモチャ、スポーツ用品など、あらゆる商店がそろい、旅館、小料理屋、レストラン、バー、スナック、トルコ風サウナまで立ち並ぶ盛り場へと変身しつつある。さらに…(中略)…銀行、百貨店を始め、地上14階、北関東最大と呼ばれる鹿島都市センタービルも偉容をほこる。」

このように鹿島地域が発展し、新たな盛り場が生まれるのにしたがって、浜町の持つ魅力は半減していき、客の流出は避けられなくなっていった。そのような中で浜町にあった店舗は次々に閉店もしくは別の地に移転していき、浜町は盛り場らしさを失っていったの

である。

もし潮来町が、開発前のように周辺地域における絶対的な地位を脅かされることなく保ち続けていたら、花街はいずれ寂れる運命にあったとしても、浜町は歓楽街として盛り場ではあり続けたであろう。例えば、盛り場としての規模が大きく異なるために例としては適切ではないかも知れないが、上野の下谷や渋谷の円山のように、花街が衰退した後も性格を変えつつ盛り場として機能しているところは少なくない。しかし、潮来町の浜町は、もはや盛り場と呼ぶことができない場所になってしまった。つまり、浜町が花街でなくなるのと同時に盛り場としての機能も失ったのは、時代の流れが原因ではなく、潮来町の周辺地域における重要性が低下したからであると結論付けざるを得ないのである。

なお、本稿の対象地域である潮来町浜一丁目地区の花街の灯が完全に消えたのは、近年のことである。昭和50年代後半に芸者が激減した後も、浜町の人々は芸妓組合と見番を残し、残った芸者たちが細々と御座敷に出向いてはいた。しかし、人件費の問題などで、ついに見番を維持することが困難となり、平成5年に芸妓組合を解散することになった。解散当時残っていた芸者は総勢10人たらずで、後継者がいないためにみな高齢であった。

IV. おわりに

本稿では、江戸時代の遊廓に起源を持ち、昭和60年頃まで盛り場として存続した、潮来町浜一丁目地区の大正時代から現在までの変遷を追った。そして、盛り場としての盛衰をたどっていくうちに、いずれの時代においても、盛り場の盛衰と地域との間には密接な関係があり、盛り場と地域とを分離して考えることはできないという結論に達した。以上の盛り場の盛衰と周辺地域との相互関係は、表2に示した。その際、Ⅲ章で提示した時期区分は、盛り場の転機に合わせて修正した。な

表2 浜町の盛衰

	浜町の変化	地域的事象	国全体の事象
①大正時代	[花街の衰退] ・全体的な店舗数の減少 ・引手茶屋の廃業	← 成田鉄道佐原駅開業 (明治31年)	生活のモダニズム
②昭和初期	[花街の繁栄] ・全体的な店舗数の増加 ・貸座敷の廃業 ↓ 私娼・カフェーの増加	← 農家の副業、縫紉製造による現金収入増	
③戦中・戦後期 (昭和13年頃～昭和30年代前半)	[花街の衰退] (戦中) ・営業自粛 (戦後) ・休業状態 ・私娼の消滅	← 復興を模索	・第二次世界大戦勃発 ・売春防止法施行 (昭和33年)
④高度経済成長期 (昭和30年代後半～昭和50年代前半)	[花街の繁栄] ・花柳界の店舗と簡便な飲食施設の共存	← 鹿島臨海工業地域の開発	・全国総合開発計画 (昭和37年)
⑤昭和50年代前半～現在	[花街・盛り場の終焉] ・全体的な店舗数の激減	← 鹿島を中心とする周辺地域の発展	

(筆者作成)

お本稿では、一地域の盛り場の変遷を捉えることに終始しているため、今後の課題として、異なる地方小都市の盛り場にも焦点を当て、同じ時間軸の中で比較対照することも必要であると考えます。そうすることによって、より一層地域と盛り場との密接な関係が見えてくるのではないかと思います。また今後、地方小都市の盛り場と、大都市の盛り場のあり方、及びその変化とを比較する視点を導入することも検討していきたい。

(お茶の水女子大学・院生)

〔謝辞〕

本稿は、お茶の水女子大学に1999年度提出した卒業論文に、加筆・修正を加えたものである。

現地調査及び文献調査において全面的にお力添え下さった潮来郷土史研究会の故大久保錦一先生、また聞き取り調査に協力して下さった皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

〔注〕

- 1) 『都市と盛り場 商業立地論序説』, 同友館, 1977. 『盛り場 人間欲望の原点』, 鹿島出版会, 1981. などが代表例である。
- 2) 山近博義「文学作品にみられる近代盛り場—明治・大正期の京都新京極の場合—」, 地理学報31, 1996, 17~34頁。
- 3) 前屋敷史子「新聞記事にみる盛り場の歴史的変容—第二次世界大戦後の鹿児島市天文館地区を事例に—」, 歴史地理学39-4, 1997, 25~33頁。
- 4) 吉見俊哉『都市のドラマトゥルギー』, 弘文堂, 1987, 24頁。
- 5) 神崎宣武は『盛り場のフォークロア』(河出書房新社, 1987)の中で、盛り場と周辺地域の関連性について直接は言及していないものの、盛り場に出入りする周辺地域在住の一行商人を取りあげ、盛り場が周辺地域と関わっていることを示唆している。
- 6) 前屋敷は前掲3)の中で、「<出来事>として盛り場を捉える研究の対象地域は、首都圏や広域中心都市がほとんどであり、管見の限りでは地方都市を対象とした研究は見られない。」と述べている。
- 7) 高橋勇悦「都市化社会と盛り場」, 都市問題69-2, 1978, 14-24, 14~15頁。
- 8) 大久保錦一『潮来遊里史と潮来図誌・潮来絶句・潮来節』, デザイン・アンド・デベロップメント, 1993, 85頁。
- 9) 川名 登『河岸に生きる人々—利根川水運の社会史』, 平凡社, 1982, 156頁。
- 10) その条件とは「一、御領(水戸藩)内の婦女を召し抱えざること。二、生国身元(出身地)等相分からざるものを召し抱えざること。三、御領(水戸藩)内の者は遊興な

さしめざること。」の三点であった。(新庄桜涯『潮来華街史』, 潮来町商工観光課, 1971, 6頁.)

- 11) 前掲10) 6頁。
- 12) 潮来の河岸が衰退した理由としては、①蔵屋敷の前の河川に土砂が流入したため浅瀬となってしまう、船が潮来の河岸に着岸することができなくなった。②利根川本流の流路が潮来からそれてしまった。③船が大型化したため、潮来の河岸に出入りすることができなくなった。の三つの説が考えられている。前掲8) 89~90頁。
- 13) 潮来町史編さん委員会『潮来町史』, 潮来町役場, 1996, 373~379頁。
- 14) 潮来町史編さん委員会『新編潮来集』, 潮来町教育委員会, 1998. に収録されている。
- 15) 小川泰堂『観海漫録』『改訂房総叢書第四輯 地誌(二) 日記紀行』, 改訂房総叢書刊行会, 1959, 384~386頁。
- 16) 波末巴屋主人『潮来繁昌誌』, 公文堂, 1893。
- 17) 明治6~28年頃作成と推測される。詳しくは拙稿「芸娼妓出世双六とは?」(お茶の水地理41, 2000, 77~81頁)を参照。
- 18) 前掲10) 10頁。
- 19) 聞き取り調査は1999年に以下の6人の協力のもと行なった(カッコ内は調査時の年齢)。A氏(85):大正3年生まれ。女性。生家はかつて浜町で引手茶屋を営んでいたが、後に芸者置屋に転業。
B氏(84):大正4年生まれ。男性。生まれは浜町ではないが、かつて役人として浜町に関わっていた。
C氏(72):昭和2年生まれ。男性。幼少時から現在まで浜町に在住。
D氏(72):昭和2年生まれ。男性。浜町の旧黒門近くで古くから商売を営んでいる。
E氏(54):昭和20年生まれ。男性。生家は浜町の芸者置屋で、昭和49年に自ら芸者置屋兼割烹を開業。
F氏(53):昭和21年生まれ。男性。生家は浜町ではないが、現在まで継続して潮来在住。
- 20) いはらき新聞, 大正2年2月10日記事中。

- 21) 南 博編『日本モダニズムの研究』、ブレーン出版、1982、150～156頁。
- 22) 高塚菰村『潮来と鹿嶋香取』、崙書房、1974、35～37頁。1917年初出。
- 23) 前掲8) 113～114頁。
- 24) 当時の成田鉄道、総武鉄道の開通の略史は以下の通りである。
 明治27年(1884)12月
 総武鉄道：本所(現錦糸町)－佐倉間
 明治30年(1897)1月
 成田鉄道：佐倉－成田間
 12月同：成田－滑川間
 明治31年(1898)2月
 同：滑川－佐原間
 明治37年(1904)4月
 総武鉄道：本所－兩國橋間
 (松田 実『関東地方通運史』、関東通運協会、1964、628頁。)
- 25) 前掲13) 632～633頁。
- 26) 松川二郎『全国花街めぐり』、誠文堂、1929、197頁。
- 27) 井上章一『愛の空間』、角川書店、1999、100頁。
- 28) 「だるま」というのは酌婦を兼ねた娼婦のことであり、不見転(みずてん)と同じで転ぶ、すなわち誰とでも寝るという意味で使われていた隠語である。前掲27) 171頁。
- 29) 海野 弘『東京の盛り場』、六興出版、1991、92～98頁。
- 30) 前掲26) 196頁。
- 31) 中村隆英『昭和経済史』、岩波書店、1986、50頁。
- 32) 前掲31) 49頁。
- 33) 昭和4年における水田を含めた総耕地面積に占める桑畑面積の比率は、茨城県全体が14.2%だったのに対し、潮来町は1.8%に過ぎなかった。前掲13) 677～680頁。
- 34) 「藁工の副業で嫁入り支度 年々発達する行方地方箆吠」(いはらき新聞、昭和5年4月6日)、「行方箆が引っぱり農家は全く不景気知らず」(いはらき新聞、昭和7年12月17日)など。
- 35) 前掲13) 789～796頁。
- 36) 飯島 博『利根川』、三一書房、1958、72頁。
- 37) 前掲8) 133～134頁。
- 38) 神崎宣武『盛り場の民俗史』、岩波書店、1993、134～135頁。
- 39) 潮来町役場企画課『25周年記念誌 潮来町』、潮来町役場、1981、前掲13) 769～774頁。
- 40) 佐々木毅・鶴見俊輔・富永健一・中村政則・正村公宏・村上洋一郎『戦後史大辞典』、三省堂、1991、141頁。
- 41) 高校地理教育談話会『開発と地域の変貌鹿島臨海工業地帯』、大明堂、1975、171頁。